
赤い糸

優宮

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い糸

【Nコード】

N7332X

【作者名】

優宮

【あらすじ】

クリスマスイブ。獅子岡という少年に遊びが目的でつき合わせれそうになった1人の少女と同じ日にその少女に告白しようとしていた1人の少年は、クリスマスイブの夜に偶然会う。互いにすれ違う心はいつまでも落ち着かずにいたそんなある日、獅子岡自身が少女に言い寄ってきた。

更新はとってもとってもゆっくりです

* 1 *

あの雪の日、君に会った。黒の長いマフラーで顔を隠して泣いていた君の顔をよく覚えていて。クリスマスイブだというのに失恋でもしたのか。うつすらと涙の後が残っていた。

「……平山風邪ひくぞ？」

「……！鈴木くん。」

鈴木 啓太^{けいた}一応13歳。中1です。那美中学校でサッカー部、これといった特技はありません。

平山と言われた少女は恥ずかしそうに俺を見る。

「……失恋したんだ？私。」

とにかく長い間泣いていたみたいだったから近くのカフェで温まることにした。しばらく俯いていた平山も時間が少したった今、今日あった話をしてくれた。

同じクラスの獅子岡^{ししか} 龍真^{りゅうま}に告白したらしい。するとキスしてきてたらしい。びっくりして獅子岡の顔をみると「付き合おう」って言うてきたらしい。

「よかったじゃん。失恋じゃないし」

「その次だよ。」

で一緒に帰ろうっていったんだけど今日は友達を遊ぶ約束しててすぐに行かなくなちゃならないと言われて仕方がなく一人で帰ろうとしたときに忘れ物しているのに気がついて取りに行ったら獅子岡と何人かの友達がいたらしい。そのはなしの内容が最悪^{ゲス}だったんだ。

「お前、平山と遊ぶのかよ」

「まーね 付き合おうって言ったたら大喜び！一応、週3で家に来てって言ったんだけどよろこんでって感じ？」

「うーわ。最悪じゃん！どうするの？今日やるの？」

「終わったから遊ぼうって言う」

「お？」

「でえ〜〜〜やる。」

気持ち悪いほどのあくどい笑みを浮かべて友達連中に笑う。

「じゃあさ〜断られるかで賭けようぜ？1人1万円で。」

「じゃあ〜断るは？0人で断らないが9人〜」

人の恋愛で賭け事をしてさ。

私はだから言ったの。

「人の恋愛なんだと思っているの！賭け事とか最悪！破棄よ！最悪！！」

「って」

「…」

笑っていてもつらいんだと思う。

泣きそうな顔をするのを俺は見えていられなかった。

だから。

「俺と付き合って」

* 2 *

「はい？」

私はびつくりした。鈴木くんは悪ふざけはしないし。しかも、目が、真剣なんだ。

「俺、本気だから。獅子岡には悪いけど、俺はアイツのことゲスにしか思えないし。本気でスキだから。お前が思っているよりもスキだから。」

びつくりさせたかな？

でも本当なんだから、別にいいよね？

俺、平山が好きだから。

「…じゃあ、お願いします。これからよろしくお願いします」
「うん。よろしく。」

君の瞳はずいぶん恐れがあった。

大丈夫、怖がらせたりはしない。君を愛する。ずっと、放さないから。

どんなにつらくても。優しく抱き上げられるくらいに強い男になる。獅子岡みたいになやつにはならない。約束しよう、君を捨てたりなんかはしない。

＊３＊

獅子岡 龍真は笑っている。平山と鈴木の２人を見て。

「どうする？」

「何が？」

「平山」

「何がしてほしいの？平山は２年になったら戻ってきてくれるよん」

「キモい。やっぱりゲスじゃん。獅子岡」

「けーたん」

本田 圭太。啓太の幼なじみであり獅子岡の親友でもある少年だ。

「く」と鼻歌を歌いながら携帯の中にある一人のあどれすをはじき出す。

「実花」

「何くく 龍真ーっ」

「頼みがある。」

「いいよーーー 何？」

「平山の心をえぐってくれないかな？あと、お前の友達全員使わなくてもいいからさ鈴木 啓太もやっておいて」

「あいよー！」

そのとき、圭太けーたんは思っていた。

実花と龍真は仲がいいよな。

双子の男女のあんたらは最悪な考えだ。

やっておいて。

それは。

あの2人に悲劇が落ちる。

知っているよな。

元は獅子岡のグループに入っていた2人だ。

助けられないかもしれない。

啓太。無事でいろよ。

* 4 *

「メアド変えました。よろしく!」

実花がそうメールを打ってきた。

Re: Re

- - - - -

おっけー

登録しときやした!!

kei ta

- - - - -

「…あつ鈴木くん。実花からメール着てた?」

儂げな少女が啓太に声をかける。純粹そうで物腰の柔らかい少女

「平山」だ。

「うん。一応登録はしておいた。あの獅子岡家の人だし…ね?」

「うん…あーあ。実花つて1ヶ月に一回はメアド変えるんだよね

…これで15回目。もーメンドクサイなあ。」

「獅子岡も変えたよ。確かねww」

「え…?あ、そっか、少し前に変えていたよね…」

一日の半分以上を困ったような顔をしている平山は今現在も困っているような顔をしていた。

「…啓太。」

「え？」そういう。意味が分からないというような顔をしている。
「名前で呼んで？啓太だから。けーたでもいいけど「鈴木」って
言わないよーに。」

「え？あつ鈴木くん？？」

「はい。減点1ーww罰ゲームです！」

「ええ？！け・・・」

「け？」

やばい。めちゃくちゃ恥ずかしいよ...

めちゃくちゃ恥ずかしい...鈴木くんって呼んだら罰ゲームはいや
だケド、恥ずかしいし...

「け...けけけ...けーた...くん」

「はい。」

ほんのりと赤色に染まる頬はとても可愛かった。

「これからよろしくお願いします...」

可愛い。

「ん。」

＊５＊

「おはよう」

教室前の廊下で挨拶を優雅に交わす少女がいた。彼女の名は「獅子岡 実花」龍真の双子の妹であり、獅子岡のグループ内で一番の権力者だった。

「実花。おはよう。」

「あつ啓太！おはよう。」

「実花、おはよう。」

「ひーちゃん！おはようー！」

実花自身は柔和な笑みを浮かべながら爽やかなあの蒼い空のように美しく微笑む。

「啓太…くん。あのさあ、えっと、あの。一緒にお弁当食べようね…？」

完全スルーされながらも…

「ええーっ啓太！一緒に食べちゃダメえ？」

！…龍真の言うことは絶対。

少し寒い廊下で少し顔を赤らめる。実花の必殺技「きゅんきゅんスマイル」１（名づけたのが龍真）を啓太に送っていた。当の啓太は興味がないらしい。

「うん。平山、一緒に食べよう。」

完全にスルーだ。ムシだ。フルムシだ。

―…今に見てなさい…平山 柚果^{ゆずか}…龍真に嫌われたくないの。分
かっているでしょう？私は、龍真のためならば手段を選ばないのは
十分承知でしょ？圭太^{けいたん}がそうだったの知っているでしょ？親友の柚
果をそうするのも分からなくはないでしょ？

嫉妬にも似た感情を出し始める実花。

―…分かっているよね…？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7332x/>

赤い糸

2011年11月23日20時53分発行